
白梅屋捕物帳

橘川芙蓉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白梅屋捕物帳

【Nコード】

N6628N

【作者名】

橘川芙蓉

【あらすじ】

日本橋の薬問屋「白梅屋」の娘、桔梗は橋から身投げしようとしていた一人の女性を助ける。

彼女は、瓦版で話題の愛憎のもつれの果ての殺人事件の犯人と目されている。しかし、彼女の話しから桔梗は別に犯人がいるのでは？と考えたから？！……お嬢様と手代コンビの江戸風ファンタジー。

田季屋殺人事件

時は江戸。世界最大の都市であった花のお江戸といわれた頃。日本橋近くにある通り町の大店「白梅屋」といえば薬問屋として名をはせていた。間口五間ほどの白梅屋には数十人の奉公人が勤めている。土蔵は漆喰仕立ての立派なもので、そこに入っている薬種は、白梅屋の船で運ばれてきたものだった。先々代からこの地で商売をしていて、現在の当主は白梅籐吉衛門といった。

白梅屋には長い間子供ができなかった。ようやく授かった一人娘を、白梅屋の旦那さんとおかみさんは大層可愛がり、また甘やかしたのでその親ばかりは向こう隣に聞こえるほどだった。その大事な一粒種、桔梗は親のどちらに似たのか大変利発で、男勝りであった。桔梗が生け花や、お茶を習いたいという代わりに剣道を習いたいといっても、甘い二親のこと、止めるどころか大賛成して剣道場に通わせている。

今日も朝稽古の帰り。桔梗はいつもの袴姿に木刀をもって家へと続く道を歩いている。そのすぐ後ろを桔梗の御目付役、世話役で兄や代わりでもある手代の楽次郎が歩いていた。桔梗たちが、龍閑橋付近に差し掛かった頃、ひとりの若い女が橋の欄干から身を乗り出して川底を舐めるようにみつめていた。

まさに、欄干に足をかけそのまま川の中へ飛び込もうとしたところを、桔梗が明るい口調で声をかけた。

「こんな朝早くに、泳ぐのは早すぎるんじゃないのかな？」

女は肩を震わせ、欄干に足を置いたまま声のしたほうへと振り返った。女の顔には涙の後があり、ほつれ毛が額に流れている。粹な顔立ちの楽次郎も、こちらを見ていると知った女はあわてて欄干から

足を離し、乱れて太ももまであらわだった裾を直して、桔梗へと向き直った。

「覚悟の自殺です。どうか、放っておいてくださいませ」

「自殺かって言われて、放っておけないのが人情だろうけど……どれ、ひとつその死に様をみてやろうじゃないか」

てつきり桔梗が自分を必死に止めにかかると思っていた女は拍子抜けした表情をして、だけれど宣言したからには実行してやろうと、また橋の欄干に足をかけた。だが、さっきまで怖くなかった橋から川の距離が、今では怖い。決断できずにいる女を見て、桔梗はなんでもないことのようにまた、言葉が続けた。

「どうだい？ 私の家が近くにあるんだ。ちよいと一緒に飯でも食わないかね。こんな朝早くってことは碌な飯を食ってないのだろう。最後の晚餐とも思えばいい」

飛び込めないでいる女の動きがぴたりと、止まった。欄干からゆっくり足を下ろし、そのまま座り込んで声をあげて、盛大に泣き出した。我を忘れて泣きじゃくる女を宥めながら、桔梗と楽次郎は白梅屋に帰っていった。帰り道、泣いている女から断片的に聞いたことによると、彼女の名前は菊。日本橋に店を構える大店「田李屋」の女中をしているそうだ。田李屋といえば、日本橋に軒を連ねる店の中でも大店中の大店。白梅屋が日本橋に居を構える店の中では小ぶりなのに対し、田李屋はどこへ行っても「大店」「名店」で通じる規模の店だ。菓子屋を営んでいて、常連客には武家の者も多い。間口十八間もの大きな店で、三十数名が奉公している。白梅屋が商談をしているときに、お茶請けに出すお菓子も田李屋のお菓子だった。

さすがに、表玄関からお菊を入らせたら何事かと目立ってしまったので、裏口からそつと奥の部屋へ通す。畳の敷かれた部屋に通され、お菊はおどおどしながら桔梗に促されるままに座敷に座った。普通なら、女中が朝餉を運んでくるものだが白梅屋の習慣では、楽次郎が桔梗のために朝餉を運んでくる。今日も例外はなく、楽次郎が桔梗の分と、客であるお菊の分の朝餉を運んできた。

「どうぞ、おあがり」

桔梗が促しても、お菊はためらって箸に手を伸ばせない。裏口から入ったものの間取りから考えて、それなり的大店とお菊は察したようだ。しかも、大店の若おかみと向かい合ってご飯を食べることになるなんて、昨日までついぞ考えたことはなかった。

「食べながらでいいから、話を聞かせておくれ」

お菊は、そつと箸に手を伸ばし茶碗を持ってご飯を一口口に運んだ。白米の味が口に広がる。ゆっくりと噛んで飲み込んだ後、白飯の盛られた茶碗に視線を落としながらぼつり、ぼつりと話し出した。お菊は、田李屋に奉公する女中で、隠居した田李屋吉之助の身の回りの世話を任されている。一昨日の晩、いつものように吉之助から茶を持ってくるように言われ部屋へお茶を出しに行った後、吉之助がもがき苦しむように亡くなったのだ。すぐに奉行所に知らされ、吉之助は毒殺で、飲んでいた湯飲みから毒が出た知らされた。お菊が犯人扱いされたが、身の潔白を訴えても奉行所はおるか、田李屋の主人ですら聞き入れてくれなかったという。どうしようもなくなり、死んでしまえと思った矢先に桔梗が通りかかったのだ。

(そついえば……)

意気消沈するお菊を見ながら、桔梗は昨日読んだ瓦版を思い出した。

（田李屋さんが殺されたのは、愛憎のもつれだと書いてあったな）

瓦版は読者の興味本位にかかれるため、多少大げさに書かれている。小股の切れ上がった粹な女中が、吉之助の財産目的に近づいたが叶わず殺したと書いてあった。

田季屋殺人事件 2

「誓って、私はそんなことしていません」

お菊は桔梗にすぎるように訴えた。

「一昨日のこと、詳しく聞かせてくれないかね？」

（とても人を殺めるような人には見えない……そもそも毒物なんてどうやって手に入れたのか）

奉公人の給料は少ない。その日暮らしするのがやっとだ。薬などかえるだけのお金は貯められない。

「暮れ六つをすこし過ぎた頃でしょうか。大旦那様からお茶を二つもってくるようにいつけられました」

「誰か、客がきたのかね？」

「旦那様と部屋で話をするからということでした。店は暮れ六つで閉めていますから、旦那様方の夕餉が終わった頃だと存じます。私はいつものように台所で沸かした湯を使って湯飲みに茶をいれ、大旦那様の部屋まで運びました」

お菊は、箸をおいてため息をついた。

「大事なお話のようでございましたので、私は台所での仕事に戻りました。夕餉の片付けもございましたので。大旦那様は五つ半には床につかれる習慣がございましたので、五つ半になる前に御用に伺

いにお部屋に参りました。すでに旦那様とのお話は済んでいるようにございましたが、大旦那様の顔色が青く、具合が悪いのがすぐわかりました。なんでも食べ過ぎたとかで、薬を持ってくるように言われました。私は煎じた薬を大旦那様に飲ませましたが、あまり回復したご様子はございませんでした。すぐに、大旦那様は戻されてしまつて、非情にお苦しそうでした。その苦しみ方が尋常ではないので、私は旦那様を呼びに行きました。そして、旦那様や奥様が見守る中、お医者様が間に合わずお亡くなり……」

お菊がはらはらと目から涙をこぼす。

「お医者様が、毒殺だとおっしゃるんです。奉行所の方がこられて毒を入られたのは私しかいないと、罪人として捕らえると……」

言葉に詰まるお菊に、桔梗は遠慮なく質問をした。

「なんで、毒を入れられるのはお菊さんしかいないのか、奉行所の親分は説明した？」

「私がお出した湯飲みに毒が残っていたからだって」

きわめて状況は、お菊に不利だといえる。

「吉之助さんは、規則正しく生活する人だった？」

「それはもう……田李屋では大旦那様を時計代わりにする奉公人がいるくらいです」

「竜之介さんが吉之助さんに会いに行った理由は見当がつく？」

「特には……あ、でも私がお茶を出しに行ったときに、旦那様が『そんなにあの女に渡すのか』と言っているのが聞こえました。普段は温和な旦那様が珍しく声を荒げているので、びっくりしました」

「お菊さんにとって、田李屋ってどんなところ？」

「……私はここにしか奉公をしたことはありませんが、いいところですよ。旦那様も、旦那様もそれはよくしてくれて。旦那様は、遺言状に遺産を少しづつ奉公人たちに分けるように書いたとまでいって笑ってました」

「遺言状のことはみんな知ってるの？」

「はい。詳しい内容は旦那様たちしか知りませんが、そのような冗談をよく旦那様はおっしゃられてましたので」

桔梗は、腕組をして少し思案したあとにつこりと笑った。

「お菊さんは、行くあてはあるの？」

お菊は黙って俯向いてしまった。

「よかったら、今日だけでもうちの手伝いをしていてくれないかな？ ……あ、賃金は払うよ」

お菊は顔をあげたが、まだ不安そうな表情だ。

「ちょっと調べてみたいことがあるけれど……もしかしたら、無実の証明をしてあげられるかもしれない」

桔梗の一言に、お菊はぱつと花が咲いたように笑った。

そんな明るい雰囲気に水を差すように楽次郎が部屋の障子をあげた。

「お嬢さん、甚平親分が来られましたよ」

その一言に、桔梗は渋そうな表情を、お菊は蒼冷めた表情をしたのだった。腰を上げて逃げ出そうとするお菊を、桔梗は引き止めて、客を同じ部屋に迎えた。

田季屋殺人事件 3

甚平親分は、日本橋界限を担当する奉行所の岡っ引きで、たまにこうして白梅屋にも顔をだす。甚平親分のちぎつては投げといったような捕り物劇の話は桔梗は好きだったので、彼からよく話を聞くのだが今日のところは来てほしくなかった。用件は目に見えてわかっているのだから。

甚平が部屋の主人に断って、座ると楽次郎が持ってきたお茶をぐいと一息に飲むと、口火を切った。

「お菊つう人殺しの女を探していやす。お嬢。今朝、お嬢がお菊らしき女を家に連れ帰ったつうのを見たものがいやす。ご存じありませんか」

「私が連れ帰ったのは、頼りにしていた主人に信じれもらえず世を儚んで自殺しようとした、忠義心溢れる人です。お人違いでしょう」

お菊を前にして、いけしゃあしゃあと桔梗は言い切った。

大店の娘に、違うといわれ正面から言い返せないのが岡っ引きの立場の弱いところだ。甚平親分がイライラを募らせていると、桔梗はお菊に言った。

「ちょっと、奥の手伝いをしてきておくれ」

お菊が立ち上がると、さっと部屋の障子が開いて楽次郎が待ち構えていた。楽次郎はお菊をつれて、部屋の前から去っていった。

「親分さんが手をつけてる事件、犯人は他にいますよ」

「お嬢はけっさくことを言いやすね」

「けっさくなのは、親分さんのほうです。もしもですよ、仮に親分さんが人を殺そうとして、毒殺を選んだ場合、毒を入れた湯のみはどうしますか？」

「人に見つからねえように、処分しやす」

「処分する時間が十分にあったのに、どうして犯人は湯飲みを捨てなかったのでしょうか？」

桔梗の言葉に、うつと甚平の言葉が詰まる。

「見つかった毒は、なんだったのですか？」

「日々草から取れる毒です」

「日々草に毒があるなんて、みんな知ってると思いますか？ 親分さんはどうでした？」

「俺は、昨日医者話を聞いて知りやした」

桔梗は満足そうに頷きながら、菓子鉢に入った饅頭を手を取った。

「うちは薬問屋だから、日々草が毒にも薬にもなることを知っています。だけれど、菓子屋の奉公人が知ってると思いますか？」

またまた、甚平は黙り込む。

「裏口とかなかったんでしょうか。田李屋さんは大店だから裏口にまで目が行かないと思いますけど」

「裏口には、人がへえった形跡はありやしねえ」

「どうしてそんなことが言い切れるんですか？」

あまりにも自信満々に言い切る甚平に、桔梗は興味を引いたようだ。

「俺はそこにいたんだぜ」

「裏口にずっといたんですか？」

「違エよ。ちょうど田李屋さんに、用があつてな。旦那には、廊下で会って立ち話をちつとしていた……ご隠居の部屋がそこからよく見えたんだ」

その後、何度かお菊が吉之助の部屋にあわただしく出入りをしていたのを、甚平はみたらしい。吉之助は、「茶を早く入れて来い」だの「薬湯は熱いうちじゃないと飲まない」だのせつかちだったらしい、吉之助のために女中たちが廊下を走り回るといふのは頻繁だったらしい。竜之介も、父親の気まぐれのために女中が走っているのだらうと、気にも留めなかったらしくようやく、吉之助の異変に気がついたのはお菊や他の女中たちがたくさんの手ぬぐいや、手桶などをもって、吉之助の部屋に駆け込んだときだという。

「すぐに、かかりつけの医者呼びやした。でも、手遅れだったぜ」

医者が毒殺だと、みなに告げた。すぐに、甚平は殺人事件だと屋敷

の出入りを封鎖した。そして、台所に下げられていた湯飲み茶碗を発見して、奉行所に持ち帰ったところ事件に使われた毒物がでてきた。すぐにお菊の持ち物が調べられた。そこからでてきたのは、毒物がわずかに付着した薬方用の薄い和紙だった。

「どいつが見たって、犯人だと言ってやがる証拠だぜ。それを、お嬢さんは違うつう。なんでですかい？」

「お菊さんが吉之助さんを殺しても、なんの特にもならない。むしろ、損ばかりですよ」

桔梗はちょうど適温になったお茶をすすった。

「吉之助さんが亡くなれば、奉公人全員にいくらのお金がもらえるんですよ。罪を犯しちゃそれはもらえません」

「そいやそうか……」

甚平は、ぼんと膝をたたいた。納得してくれたのはいいが、お菊が犯人だという疑惑と同じだけの無実だという証明しかまだできていない。

「さて、ここら辺でお引取り願えませんか？ お菊さんはうちで預かります」

「しかし……そりゃ……」

「ちょうど、人手が足りなかったのですよ。母も喜びます。……何か？」

桔梗が笑顔で聞き返すと、甚平は押し黙った。甚平も何かと「白梅屋」に都合をつけてもらっているのだから大きな顔はできないのだ。世の中もちつもたれつが判らない甚平ではない。しばらく考え込んだ後、「お嬢さんなら仕方ない」と甚平はみやげに饅頭をもらって白梅屋を後にした。

田季屋殺人事件 4

「気になることがあるんだよ。遺言は誰が知っていたのか……とい
うのがね。これが願ったら犯人がすぐにわかるはずだよ」

田季屋への道すがら、桔梗は楽次郎に自分の推理を聞かせる。それ
を楽次郎が一步引いたところで桔梗の話を聞いているのがいつもの
二人だった。

田季屋は間口十間ほどの大店で、いつもなら賑やかに、店先にはさ
まざまな季節のお菓子が並んでいるはずである。ただし、今日は不
幸があつたので店は閉じられている。桔梗は勝手口の人に呼び、中
に入れてもらった。旦那は留守で、奥の部屋ではおかみが寝込ん
でいるという。女中の案内を受けながら、桔梗と楽次郎は奥の部屋
に続く廊下を歩いた。奥の部屋では、一人の女が寝込んでいた。
ちょうど起きていたのか、女中が障子越しに呼びかけると部屋から
返事があつて、入室の許可がもらえた。わずかに障子を開けて、
桔梗はおかるの部屋に入つていった。

「桔梗ちゃん、きてくれたの？」

布団の上に取り上がつておかるが桔梗を出迎えた。おかるは顔色が
悪く、すこしだけ髪の毛が乱れていた。

「おかるさん、具合はどう？」

「桔梗ちゃんも、聞いているでしょう？ ……お義父様が亡くなられ
て……それが、毒殺だって……しかも、下手人はお菊だなんて……」

どんどんとおかるの顔が俯向いていく。四方八方ふさがれたといわんばかりだ。

「おかるさん、よければ話を聞かせておくれ。なんぞ、力になれるやも」

おかるは力なく頷いた。

「遺言のことは知ってる？」

「この店の者はみんな知ってると思うわ」

「みんな？ どんな内容だったのか聞いてもいいかな」

「お義父様は、遺産の半分を夫に、のこりを奉公人たちに等分するように言っただけです。我が家は奉公人の数も多いので、一人当たり少ない額ですが全員に渡してほしいと言っていました。割り切れなかった分は、そのまま夫の取り分になります。ただ……」

おかるは、そこでため息をついた。

「夫が言うには、自分をよく世話してくれたお菊には奉公人にあげる額の二人分をやると……そうお義父様が言っていたと」

おかるは目を伏せて言葉を続けた。

「お菊は働き者です。かんしゃくもちのお義父様の世話を良くしてました。私は、それでも構わないと思ったのですが……夫はそれに納得いかないようでした」

「ご隠居と言い争いでも？」

おかるが言いにくそうにしていることを、桔梗はすばりつついた。おかるは、はっと目を大きくしてそんなにひどいものじゃありませんが、と弁解した。

「それと……お義父様は、お菊を後添えにしようと考えていましたし」

「後添えって……！ ご隠居さんと、お菊は祖父と孫ぐらいの歳の差が……」

おかるは、からりと笑った。

「お義父様は、隠居としたといってもまだ元気で、吉原に通うぐらいです。私は存じ上げないのですが、お義母様とお菊はよく似ているとか」

おかるが嫁いだ時にはすでに、吉之助は独り身だった。やはり病で、妻を亡くしていたのだ。

「そっか……お菊はいい娘さんだからね」

自分でもなんの意味をなさないと思いつつも、桔梗は言葉を返した。

「そっだ、おかるさん……実はとつつあんから頼まれてね。ご隠居さんに貸した薬種の本が返してもらってないらしいんだ。すまないんだけど、ご隠居さんの部屋を見せてもらってもいいかな」

「ええ……どうぞ。案内をつけましょうか」

「いや、大丈夫。……さ、行こう楽次郎」

桔梗は礼儀正しくおかるにお辞儀をして部屋から出て行った。長い廊下を歩きながら、楽次郎はこっそり桔梗の耳元にささやいた。

「旦那様からそんな頼みごと承りましたっけ？」

「そうも言わないと、ご隠居さんの部屋がみれないでしょ……本当は、お菊さんの部屋と旦那の部屋も見たいのだけれどね」

店は閉めているものの、葬儀の準備やらなにやらで忙しいらしく、母屋にはあまり人がいない。桔梗は吉之助の部屋に行く途中で、竜之介の部屋の前で立ち止まった。あたりに人の気配がないことを確認して、こっそり障子をあげた。

「お嬢様……！」

楽次郎が小さな声で桔梗を諫めるが、桔梗は聞く耳持たずだ。足音を立てないように部屋に入り、ざっと部屋を見渡す。大店の店主の部屋ではあるが、非常に質素だ。文机と小さな筆筒だけが部屋の家具だ。部屋の真ん中には火鉢が置いてあった。桔梗はためらいなく文机の上に置かれた美しい細工の施されたすずり箱を開いた。中には、高そうなすずりと、上質の筆、小さな小鉢が入っていた。小鉢の中には白い粉が盛られている。

「楽次郎、台所へ行って女中さんに、漆塗りで金の梅の模様の入った椀を使っているのは誰か、聞いてきておくれ。理由はなんでもいいよ。持ち主が誰か知りたいんだ」

桔梗は、美しい漆塗りの金箔で梅の模様の描かれた小鉢を手に持った。それと同じ一そろいを使っている人物を探し出せというのだから。楽次郎は返事をしたが、桔梗に早く部屋から出るように言った。

「やれやれ、心配性だね……」

桔梗は、小鉢をもとあったところに戻し、すずり箱のふたを閉めた。足音を忍ばせて部屋から出ると、吉之助の部屋へと向かった。

あらかた取り調べは終わったものの、まだ片付けていないとおか
が言っていたので、吉之助の部屋は生前のままなのだ。親子揃って
質素であるようで、文机と筆笥がひとつづつおいてあった。息子の
竜之介の部屋と違うのは、小さな屏風と火鉢が置かれていることだ。
屏風にも火鉢にも、梅の模様が描かれていて同じ模様でそろえるあ
たり、持ち主の趣味のよさがうかがえた。桔梗は障子を開けて庭
を眺めた。よく手入れされた庭で、甚平の言つとおり店と母屋をつ
なく廊下で立ち話をしていれば、吉之助の部屋への出入りがよくわ
かる。裏口の木戸もあったが、やはり廊下から丸見えだ。

（この期に及んで、誰かが侵入してきてご隠居さんに毒を飲ませた
と信じたいなんて……私もとんだお人よしだ）

桔梗は自嘲気味に一人微笑んだ。その様子を、台所から戻ってきた
楽次郎が見て心配そうに眉根を寄せる。

「お嬢様……どこかお加減でも悪いのですか？」

「なんでもないわ。どうだったの？」

「品のいい漆塗りの器は、吉之助様のもののようにです。箱膳を見せ
ていただきましたが、ちゃんと一揃いございました」

首尾よく必要な情報を聞きだしてくる楽次郎の言葉に、桔梗は満足
そうに頷いた。女中たちが顔を赤らめながら、男前の楽次郎の問い
かけに健気に答えている姿が目につかんだ。

「小鉢には、塩が山に盛られていた？」

「さようで……ご存知だったんですか？」

「違うの。すべてのことが、小鉢に塩が盛られているだろうと推理させた」

「それじゃあ……お嬢様……」

「甚平親分を呼んでこなくてはね……もうひと働きしてほしいのだけれどいいかしら？」

につこり笑った桔梗の表情に楽次郎が否やをいえる訳がなく、桔梗のお願いを黙って聞いた。

桔梗は、田李屋の家人と甚平を一部屋に集め円陣に座らせた。その中心に、桔梗が立っている。いつも影のように付き従う楽次郎は桔梗のいいつけで、今はいない。変わりに、犯人と言われているお菊が人目を忍ぶかのようにひっそりと座っていた。

「みなさんに集まってもらったのは、ご隠居さんの事件についてです。甚平親分がこちらのお菊を罪人だと目しているが、私にはどうしてもそう、思えない。ちょっと調べさせてもらいました」

ここで、言葉を切って周囲を見回す。田李屋の主人の竜之介やおかゝるなどは驚いている。

「ご隠居さんは、……家族の方々は知つての通り、規則正しい生活をする、すこし気の強い、頑固な方でした。規則正しい生活、というにはある意味隙を作ります。誰の目も届かないところで毒を盛り、知らぬ顔を突き通すことも可能です。犯人がご隠居さんを殺した理

由はなんでしょう。毒殺というからには、かつときて突然の犯行ではありません。明確に殺意を持って、計画を立てたのです。ご隠居さんは頑固だけれど悪い人じゃない。むしろ、目下のものにも感謝の心を忘れない人だった。遺言状にそれが表れている。田李屋に奉公する者すべてに、財産分与されています。人の恨みは買わなかつたけれど、ご隠居さんは問題を抱えていた。……財産分与のことで。ねえ、旦那さん？」

桔梗は、ずっと視線を竜之介に移して言葉を切った。竜之介は、こくりと頷いて言葉を紡いだ。

「奉公人にまで金をやるだなんて、聞いたことが無かつたんで本当に、いいのか何度か親父と話しました」

「あの日も、そうやって食事の終わったご隠居さんと旦那さんがご隠居さんの部屋で話し合つたんです。そこへ、お菊さんが頼まれた茶を運び……旦那さんが去ってから、ご隠居さんの具合が悪くなり……あとは、みなさんがご存知の結果になりました」

周囲の視線がお菊へと集中する。この話だけだと、やはりお菊が犯人としか思えないのだろう。

「湯飲みには、毒薬が残っていました。お菊さんなら台所への出入りは自由です。何気ない顔をして、湯飲みを洗ってしまえば、毒殺だなんて気がつかなかったかもしれない。……犯行計画を立てていた犯人が、そんな抜けたことをしますか？」

「計画では、洗う予定だったかも知れねえが、毒を飲ませて動転したのかも知れねえ……罪人はよくやることでさあ」

事件に何度も立ち会っている甚平が、桔梗の話に反論した。

「では、仮に動転したとしましょう……毒薬って、高いの知っていました？」

桔梗の意地悪い微笑みに、一同は押し黙った。

「田李屋さんが大店とはいえ、薬……しかも、需要の無い薬を手に入れるのは、金子がかなり必要です。奉公人では手が出ません。……おかるさん、これ、何だと思えますか？」

桔梗が、袂から一枚の葉っぱを取り出した。もう、この場は桔梗の独壇場で誰も止めることはできない雰囲気だ。雰囲気に吞まれ、おかるは息を吞んで答えた。

「日々草です」

「この家の庭に生えている草ですか？」

「いえ……えつと……どうだったかしら？ 庭の手入れは、主人と人に任せていますので」

話を向けられた竜之介に、桔梗は視線を向けて葉を差し出す。

「この庭に、生えている草です」

竜之介もまた、桔梗に飲み込まれるように押し殺した声を出した。

「そうでしょう。この葉はさきほど、庭先で拝借させてもらいました」

突然、話が変わったので、一同はきょとんとした視線で桔梗を見つめる。

「この日々草、毒なんです。精製すると、白い粉になり癩を起こし、心の臓が痛み出しやがて、死に至ります。……ご隠居さんはこの毒で殺されたんです」

周囲にざわめきが起きる。毒と知らなかったものが多いようだ。

「毒の知識、というのは本や誰かに師事しないと得られません。高い本は奉公人には買えませんし、奉公に急がしので、師事する暇もありません。……つまり、これが毒だと知りえたのはそれなりの金子が無いとできないことです。だから、お菊さんが犯人であることはありえません」

「だがよ、なんか食える葉と間違えて煎じて飲ます……ってことはありえねえのか？」

「甚平親分……。誰かにお出するものは、必ず味見をするのも台所番の仕事です。まず、煎じたものなら必ず味見をするでしょう。とくに、ご隠居さんはお茶の味にはうるさかった様です。必ず、味見をしたでしょう。そして、毒が入っていれば味見をした時点で毒が効きだします」

甚平が、何かに気がついたようで眉根を寄せた。

「この毒は、お茶に混じっていたら半刻もしないうちに症状が出ます。しかも、毒が効いたのはご隠居さんだけです。湯飲みからは二つとも、毒物の反応があったんですよ。なぜ、旦那さんには効かな

「かつたんでしょうね」

「まだ、歳若いからだと……先生は言っていた」

「腹が痛かったりしたことは、ありませんか？」

「ない」

「……おかしいですね。いくら若くても、毒を飲んでいれば多少の体調の不良はあります。旦那さん、毒物の耐性でもあるんですか？」

桔梗の質問に、竜之介は押し黙った。桔梗からのまっすぐな視線に、竜之介は顔をそらした。

田季屋殺人事件 6

「ご隠居さんは、食事をするときには癖がありました。さきほど、箱の中からこんなものを発見しました」

袂に隠し持っていた、漆塗りで金箔で梅の模様の描かれた小鉢を取り出す。そこには、白い粉がこんもりと盛られていた。

「それは……俺の部屋に無断で入ったんだなっ」

「これは、ご隠居さんの箱膳からお借りしたものです。ご隠居さんは飯を食うとき、塩を少しかけるのが習慣でした。そのために、こつやつて小鉢に塩を盛っていたのです。この家のものなら誰でも知っているご隠居さんの習慣でしょう」

桔梗があたりを見回すと、田季屋の者たちがうんうん、と頷いている。ただ一人、青い顔をして下を向いているものがいた。竜之介だ。

「旦那さん、これと同じものを貴方はお持ちのようです。何を入れていらっしやるのですか？」

「く……薬だ」

「確かに、漆の器として美しい形です。粉薬をこのように山盛りにしてるんですか？」

「そつだ……しゃじですくつて、飲んでいる」

「じゃあ、これを舐めても平気ですよ。ご隠居さんのなら塩、旦那

那さんのなら薬です。ほら」

桔梗は、竜之介の前に小鉢を突き出した。竜之介は、青い顔をし汗を額に浮かべて、親の敵でも見るかのように小鉢をにらみつけた。

「できないんですか？」

竜之介の隣に座るおかるが、心配そうに青い顔の竜之介を覗き込んでいる。竜之介のほほを、嫌な汗が伝い落ちた。

「俺が……殺した」

観念したように、竜之介が呟いて両手を畳の上についた。隣に座る、おかるが小さな悲鳴を上げた。桔梗は、小鉢を畳の上において言った。

「旦那さんは、ご隠居さんが使っている小鉢とそっくり同じものを用意して、そこに毒の粉を盛った。塩の小鉢と入れ替え、そうとしないご隠居さんがあの日、飯に塩をかけ夕餉を食べた。……飯を思ったよりもたくさん食べたご隠居さんは薬の効き目が遅くなった。だから、夜中に苦しんだんだ。湯飲み茶碗に入っていた毒薬は、現場を調べにきた親分さんと一緒にいていつて、隙について湯飲みに入れた……違いますか？」

竜之介は黙って頷いた。

「旦那さん、ご隠居さんを殺したのは、最近遺言状が変更されたからじゃないですか？」

「なぜ……それを」

「お菊さんが、『そんなにあの女に渡すのか』と旦那さんが言ったと聞いています。お菊さんの取り分は他の奉公人に比べたら多少額は多いが、旦那さんがご隠居さんに抗議するほどの額ではありません……別の女性に財産の四分の一が手渡ることになったんですね？」

「そつだ、もう歳だというのに遊女に骨抜きにされ、金を譲るといふ。この店は、伝統だ、品格だと俺に口すっぱく言ってきた親父が、遊女に金を譲るのは耐えられなかった。聞いたら、親父からしてみれば娘……いや、孫ぐらいかもしれない。そんな渡す金があるなら、店のために残しておいてほしかったんだ。この店は、大店と言われているがだいぶ、借金がたまっている。それを知らない親父ではないのに……！」

竜之介の告白に、周囲が静まり返った頃廊下から、楽次郎が桔梗を呼ぶ声がした。

「どうぞ、お入り」

桔梗が答えると、楽次郎は一人の女性を連れて現れた。きらびやかな着物を着て、隙の無い化粧をした花魁だ。

「これは、藤屋の花魁ご足労を」

入ってきた女性に、桔梗は頭を下げた。楽次郎に頼み、桔梗は吉原に藤屋の花魁、小花を呼びに言ってもらったのだ。もちろん、すぐに連れ出すことは叶わない。そこで、桔梗は「薬問屋白梅屋」の名前を利用したのだ。白梅屋は、吉原にもさまざまな薬を供給している。一刻だけという条件付で外出が許されたのだ。

「旦那さん、ご隠居さんが財産を残されたのは、小花花魁じゃないですか？」

「そうだ……通っているのも、小花だと」

「……ご隠居さんが、しっかりと文書に残してないのではつきりとはいえませんが、花魁はご隠居さんの孫にあたると、思います」

桔梗の言葉を引き継いで、小花が話し出す。

「母が産後すぐに亡くなりしたので、わっちは、祖母に育てられました。祖母は、いい旦那さんに通われる身でありましたんでありませんが、理由があつて結婚できなかったと言つていんです。祖母が亡くなり、行き場所の無かつたわっちは、吉原に人買いに売られ、そいで育ちました」

藤屋一だといわれる、花魁はけぶるような美しさと、匂うような色香の持ち主だった。あたりを圧倒する雰囲気はさすがとしかいいようがない。誰もが黙つて花魁の話を聞いている。

「たまたま遊びにこられた田李屋のご隠居さんから、祖母との事を聞き、わっちの身の回りを案じてくれたご隠居さんがたびたび、お金を持つていらつしゃつたんであります。お泊りの時には、まことに孫のように扱つてくれ、祖母の若い頃の話をおたくさん聞かせてくれんした」

竜之介ががつくりと、肩を落とした。父親は、色狂いになっていたのではなく、男としての責任を取るため、また、引き取ることができなかつた罪滅ぼしのために、遊郭に行きお金を渡していたのだ。

「親父はそんなこと、一言も……」

呟くように言う、竜之介に小花が両手そろえて頭を下げた。

「田李屋さんには、まことにお世話になりんした。ここまでになれたのも、ご隠居さんが励ましてくれたからでありんすえ」

花魁は、誇り高い。誰にも頭を下げるな、と教育される。それが、指をたたみについて頭を下げている。どれだけ、吉之助の言葉が、つらい遊女生活で励みになったのか伺える。

「そんな……俺は、何のために」

桔梗と楽次郎は、あとのことを甚平に任せて小花をつれて田李屋をあとにした。小花を無事に吉原まで帰り、二人並んで白梅屋を目指して歩いた。

「お嬢様、元気が無いようですね」

傍目には、落ち込んでいるようには見えない桔梗だったが、長い間ずっと一緒にいる楽次郎には桔梗が気落ちしているのがわかったようだ。

「旦那さんが、ご隠居さんを殺そうと決意したときのことを考えていたの」

桔梗は、どこか遠くを見ながらぼつり、と呟いた。

「大店の跡継ぎ、伝統の味を守る、大勢の奉公人の責任者……いろいろな重圧に旦那さんは耐えてきたんだと思う。それでも、旦那さんの代になつたらあまり振るわなくなつた。旦那さんはすごく焦つ

ていたんだと思う。それなのに、ご隠居さんは遊郭遊び……実際に遊びじゃなかったのだけれど……嫌な気がしたんだと思う」

桔梗は、橋の真ん中で足を止めて、欄干に寄りかかった。奇しくもそこは、お菊が身を投げようとしたところだ。

「嫌いにはなれなくて、でも、腹立たしくて……お店のことを考え抜いて、決意したんだろうなって思うと、どれほどの強い思いがあったのだろうって」

川面を流れる風が、桔梗のほほをなでていった。

「いつか、私も……」

そうやって、お店のためと苦渋の決断をするのかな？

ともすれば、風に吹き流されてしまいそうな小声で桔梗は言った。桔梗はその肩に、薬種問屋の将来と、十数人いる奉公人の運命を乗せられていることを自覚している。薬種問屋の跡継ぎでさえ重圧を感じるのに、天下の田李屋、大店の田李屋の跡継ぎだった竜之介はいかほどの、重さに耐えていたのだろう。

「お嬢様、そばにいます。……ずっとお嬢様のそばにいますから」
消えて無くなりそうだった、桔梗の呟きを一言も漏らすことなく楽次郎は聞いていて、彼女の隣に並び力強く言った。

「もう、急に何よっ……行くわよ、楽」

急に近づいた楽次郎に、桔梗は赤面しつつ、つつけんどんに答えて

しまう。染まった頬を楽次郎から隠すために、勢い良く身を翻して桔梗は歩き始めた。その姿をくすり、と楽次郎は微笑んで、急いで桔梗の後をついて行った。

家々からは、飯の炊く湯気が立ち上り、それが橙色に燃える空に白い吹流しのようにゆれていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6628n/>

白梅屋捕物帳

2011年4月3日07時14分発行